

S.C.WORKS 今週のスタディ！

【ヘッドライン】

- 1) 「セブン&アイ、カット野菜の鮮度向上、PBで低温加工」
- 2) 「コーヒー豆専門のショッピングモール設立」
- 3) 「団地にヤギがやって来た、URが町田で除草の実証実験」

1) 「セブン&アイ、カット野菜の鮮度向上、PBで低温加工」

セブン&アイ・ホールディングスはコンビニエンスストアなどで販売するカット野菜を刷新する。11月から一部商品の生産委託先を、低温加工できる工場に切り替え、鮮度を高める。商品はプライベートブランドとして販売する。価格を変えずに品質を上げて、手軽に料理を済ませたい女性や高齢者の需要を取り込む。

約10商品のうち、まずキャベツの千切りなど4商品をPB「セブンプレミアム」に切り替える。価格は1袋105円。野菜いため用などもPBにすることを検討する。セブンイレブンでは11月から中国地方で先行販売、来年2月までに全国に広げる。イトーヨーカドーなどでも順次扱う。

4商品の生産委託先はセブンイレブンのサラダ工場から、業務用カット野菜の加工を手掛ける4社7工場に移す。野菜の切断面の劣化を抑えるために、工場の温度をセ氏4度以下にする。キャベツの千切りは細さを従来の1ミリから0.9ミリとし、口当たりを軽くする。カット野菜の市場は拡大傾向にある。2013年度は10年度比2.5倍の1000億円超。セブンイレブンはカット野菜の売り場を従来比5割広げる。セブン&アイでは14年度のカット野菜の売上高を12年度比2.3倍の150億円に引き上げる。

また、同社は高級路線PBの「セブンゴールド」を拡充する。10月にペットボトル入りコーヒーとロールパンを売り出す。11月にアイスクリーム、12月に紅茶飲料も追加し、2013年度中に現在の28品目から50品目に増やす。

10月8日発売の「金の珈琲（コーヒー） ブラック・無糖」は400ミリリットルで138円。ブラジル産などの高級豆を使い、コクのある飲み応えとすっきりした後味に仕上げた。ロールパン「金のロール プレーン」はもちりした食感や甘みを特徴とし、90円で10月下旬から売り出す。

各社PBの開発に注力し、昔のPBのイメージからは随分と様子を変わってきた。新たな商品が次々登場し、消費者にとっても強い味方となってきている。またPBの中でもランクの違いを付けるなどで幅を持たせ商品同士の競争も常に行われている。今後もその存在をさらに示していくことになると思うので、引き続き注目したい。

2) 「コーヒー豆専門のショッピングモール設立」

コーヒー豆に特化したインターネットショッピングモール「珈琲(コーヒー)楽市」が来月設立される。

設立するのは、インターネットでコーヒー豆を販売する「エフイーエム」（岐阜市柳津町）。同社社長の広瀬祥一さん（37）によると、家電やアパレル専門のモールはあるが、

コーヒー豆に特化した専門のモールは国内初といい、「商機拡大とコーヒー文化をさらに広めるのに役立てば」としている。

珈琲楽市は、同じ業者が協力して専門のモールをつくることで、コーヒーに対する消費者の関心を高め、効率的な顧客の獲得を図るのが狙い。これまでは各サイトがバラバラにあり、大手サイトに出店しても十分に閲覧してもらえないなどの課題があった。100店舗の開業で、月額5000万円の売り上げを目指しており、これまで数十店の資料請求があった。県の「新ビジネス展開応援事業費助成金事業」に採択されており、総事業費約700万円のうち、最大200万円が補助される見込み。また、広瀬さんの店にある大型冷凍施設でコーヒー豆の鮮度を保ち、一括配送することでコストダウンも図る。

県とコーヒーの縁は深い。大垣藩出身の蘭学者・宇田川榕菴（ようあん）が「珈琲」の当て字を考案したといわれ、おいしいコーヒーに不可欠な良質な水にも恵まれている。総務省の全国消費実態調査では、県の世帯当たりの喫茶消費額は月額974円で全国1位。同省の経済センサスによると、人口1000人当たりの喫茶店数も1.54店と、2位につける。

一つの物に特化したポータルサイトをつくることで、より専門的な知識と商品を手に入れやすくなる。一社がたくさん扱っているのも良い点が多いが、複数の店を比較検討して購入できるというのもメリットは多い。ホームページづくりが簡単になってきたことなどもふまえると、これからこのように細分化されたポータルサイトが増えるのではないかと思った。

3) 「団地にヤギがやって来た、URが町田で除草の実証実験」

ヤギに雑草を食べさせて人間の代わりに除草させようという取り組みが9月24日、町田山崎団地で始まった。独立行政法人都市再生機構による実証実験で国内の住宅団地では初めて。草刈り機や自動車の燃料が不要で、刈り取った草を焼却する必要がなくなるため二酸化炭素の排出量を減らすことができるエコな除草方法。ヤギとの触れ合いを通じてのアニマルセラピー効果やコミュニティ活性化も期待する。

実証実験の場所は団地を抜ける都市計画道路の事業用地。人手で年1回除草しているが、今回のヤギ除草でコスト削減効果などを検証し、他の管理用地に広げることを狙う。実験当初は、クズやススキが生い茂る約300平方メートルの区画に、横浜市内の会社から借りた「穏やかな性格」だというオス1頭とメス3頭の計4頭を放した。白い屋根のかわいらしい小屋も設置する。

敷地の上に架かる歩道橋からは、通りがかりの住民らが珍しそうにヤギを眺めていた。26日には近隣幼稚園の園児ら約20人が見学に訪れ、ヤギとの触れ合いを楽しんだ。

「今後も住民や近隣の福祉施設の高齢者などがヤギと触れ合う機会を設けていきたい」と団地管理者。実験は11月29日まで。

山崎団地は1968（昭和43）年に管理を開始した116棟3920戸の大規模住宅団地。65歳以上の人口割合は40%を超える。居住者が野菜を育てるラインガルテン（貸農園）や自治会が管理する水田など環境に配慮した取り組みを行っている。

除草し、更に動物とのふれあいも楽しめると言うこの取り組みはおもしろそうだ。動物園などの会に行かないと出会えない動物が身近に居ることで、人が集まりコミュニティも広がりそうだ。単身高齢者の孤独化が騒がれている中、こういった自然・いきものとのふれあいの場が増えると嬉しい。カシミアセーターが流行した際、大量生産するために頭数を増やし過

ぎて飼育しているモンゴルの砂漠化が進むというニュースを読んだことがあるが、人が管理出来る範囲内ならばこういった共存は可能だと思う。